

機関番号：17301

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720040

研究課題名 (和文) 近代ドイツにおける美術工芸工房の比較研究

研究課題名 (英文) Modern 'Werkstätten' for Kunstgewerbe in Germany

研究代表者

針貝 綾 (HARIKAI AYA)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：70342425

研究成果の概要 (和文)：本研究ではドイツ工房を中心に調査を行ってミュンヘン手工芸連合工房と比較し、以下の点を確認した。1900年前後、ドイツに乱立した主に家具の制作販売を行う美術工芸 (Kunstgewerbe) の諸工房 (Werkstätten) は、しだいに経営体制を近代化し、吸収合併・提携により会社の規模を拡大し、時には敵対的關係における競争により成長を遂げた。また、博覧会や展覧会、教育に関与することにより、近代ドイツ美術工芸の発展に寄与した。

研究成果の概要 (英文)：In this research, the following facts were confirmed regarding the Deutsche Werkstätten in comparison with the Vereinigte Werkstätten für Kunst im Handwerk. The Werkstätten for Kunstgewerbe, workshops dedicated especially to furniture production, originated around 1900 in Germany, and gradually developed their own modern management system. They also grew by means of takeovers and cooperation, as well as competition with other companies. They contributed to the development of the Modern Kunstgewerbe in Germany by participating in expositions and exhibitions, and through education in arts and crafts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学, 工芸史

1. 研究開始当初の背景

申請者は科学研究費若手研究 (B) により、平成16年から平成18年にかけて室内装飾一般を扱うミュンヘン手工芸連合工房 (Vereinigte Werkstätten für Kunst im Handwerk, München) についての調査研究を行った。工房といえば、中世以来の伝統を受継ぎ、

親方の指揮の下に職人や徒弟が共に手仕事で美術品の制作を行う場を想起する。しかし、ミュンヘン手工芸連合工房は当初その名称に反して家具の工房のみを抱え、図案家と契約を結んで図案を外注し、株式会社化して各地に支店を構え、工場を建設して家具の量産を行う近代的な「工房」であった。

ミュンヘン手工芸連合工房について調査を進める中で、ミュンヘン手工芸連合工房やドイツ工房(Deutsche Werkstätten)以外にも「工房」の語を名称に冠する家具会社がドイツには多数存在し、そのほとんどが1898年からの10年の間に設立されていたことが分かってきた。しかも、それらの一部は1907年のドイツ工作連盟の創立会社に名を連ね、また創立会員のほとんどが「工房」に図案家として関わっていたことが明らかになった。この事実、「工房」がドイツ工作連盟の創立やその後の活動に関与しているのみならず、ドイツ工作連盟に先立つ近代ドイツにおける美術工芸運動において重要な役割を果たした可能性を示すものと思われる。

しかし、従来の研究では近代ドイツにおける「工房」の問題は、バウハウス教育においてクローズアップされる他は、全く重視されておらず、また会社としての「工房」の活動の実態はドイツ工房以外についてはほとんど分かっていない。そこで、本研究では1900年頃ドイツで相次いで設立された近代的な美術工芸工房について明らかにしたい。

2. 研究の目的

(1) 本研究ではまず資料のあるドイツ工房を中心として、ドイツにおいて1898年からの10年の間に設立された「工房」の語を名称に冠する美術工芸の会社の作品等の資料整理を行う。

(2) 諸工房の活動内容とそれらの相関関係を明らかにする。

(3) 諸工房を比較し、近代ドイツにおける美術工芸工房の特質とその活動の意義について検討する。

3. 研究の方法

(1) ドイツ工房ヘレラウ、ドレスデンのザクセン州立資料館、ミュンヘンの中央美術史研究所等において、主にドイツ工房に関する資料調査・収集を行った。

(2) ドイツ工房に関する文書、作品のカタログ化を行った。

(3) ドイツ工房の沿革、展示活動、工房教育についてまとめ、ドイツ工房とミュンヘン手工芸連合工房、およびミュンヘン家具調度工房とドイツ家財道具工房の相関関係を明らかにした。

(4) 特にドイツ工房とミュンヘン手工芸連合工房との比較を試み、近代ドイツにおける美術工芸工房の特質とその意義について検討した。

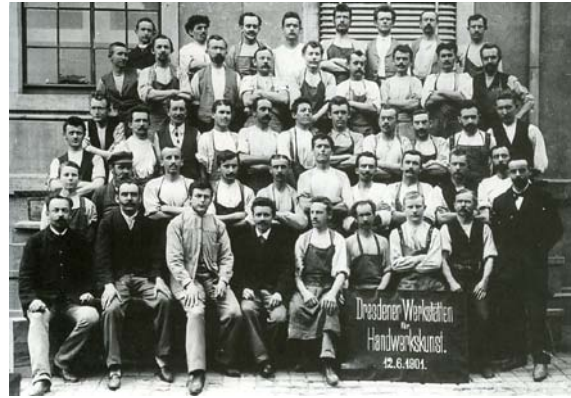


図1 ドレスデン手工芸工房従業員集合写真 1901年
最前列左から3人目がカール・シュミット。最前列一番右に立っているのがユリウス・ミュラーと考えられている。

4. 研究成果

ドイツ工房を中心とした資料調査、ドイツ工房の作品・資料のカタログ化により、本研究では以下の点を確認した。

(1) ドイツ工房の前身であるドレスデン手工芸工房シュミット&ミュラー(Dresdner Werkstätten für Handwerkskunst Schmidt und Müller)は、その出資者ユリウス・ミュラーの息子であるテオフィル・ミュラーが設立したドイツ家財道具工房(Werkstätte für Deutschen Hausrat)と敵対的ともいえる関係にあった。

(2) 1906年第3回ドイツ美術工芸展ドレスデンでは美術や美術手工芸と並んで美術工業部門が新設され、リーマーシュミットの図案をドレスデン手工芸工房が制作した機械家具など、来るべき時代にふさわしいと評価される作品が展示された。ドレスデン手工芸工房もこの展覧会に準備段階から関与し、第3回ドイツ美術工芸展の受賞者の多くがドレスデン手工芸工房や後のドイツ工房の仕事に従事することになった。

(3) ドレスデン手工芸工房は1907年には社名をドイツ手工芸工房カール・シュミット(Deutsche Werkstätten für Handwerkskunst Karl Schmidt)に変更し、さらに同年アーデルベルト・ニーマイヤーらのミュンヘン家具調度工房(Werkstätten für Wohnungseinrichtung, München)と合併して、ドイツ手工芸工房、ドレスデン、ミュンヘンとなった。ミュンヘン家具調度工房はドイツ手工芸工房の傘下に入りミュンヘン支店となったが、制作の面では独自性を維持した。

(4) ドイツ手工芸工房はそれまで工房内で行っていた家具職人や徒弟の養成を組織化し、より高度化するために、1907年ドイツ手工芸工房附属工芸専門学校および教育工房(Gewerbliche Fachschule und Lehrwerkstätten an den Deutschen Werkstätten für Handwerks)



図2 ドイツ工房内塗装部門 1911年頃

-kunst Dresden)を設立した。ドイツ手工芸工房附属工芸専門学校および教育工房の教育の基本的な目的は「生産的な素質や諸能力を工芸の基礎の上に発展させること」にあった。加えて、芸術家、手工芸家そして会社はむしろ共に協力して美術工芸における「質」の問題を意識し、「質」を高めていくべきだということも説かれており、ドイツ手工芸工房の方針にはミュンヘン手工芸連合工房やドイツ工作連盟の主張との類似性が認められた。

ドイツ手工芸工房が附属工芸専門学校および教育工房を設立したように、ミュンヘン手工芸連合工房でも工房教育は行われていたと考えられるが、ドイツ手工芸工房のように組織化された附属工芸専門学校などの存在については判っていない。しかしながら、ミュンヘン手工芸連合工房において永年図案家を務めたブルーノ・パウルはベルリン王立美術工芸博物館教育施設（後に国立ベルリン統一自由・応用美術学校に改組）長に就任してカリキュラムの改善に取り組んでおり、ベルリン王立美術工芸博物館教育施設、続く国立ベルリン統一自由・応用美術学校にミュンヘン手工芸連合工房の工房教育の理念が受継がれた可能性が考えられる。

実際、パウルがベルリン王立美術工芸博物館教育施設において改善したカリキュラムは国立ベルリン統一自由・応用美術学校のカリキュラムのベースとなった。国立ベルリン統一自由・応用美術学校自由美術の実験室は、ここでも「工房」と呼ばれ、基礎課程においてまず「諸種の工房訓練と諸種の技能・知識」を習得した後、最終的に自由美術科・建築科・応用美術科へと進み、卒業生は産業界で戦力になる人材になるように育成が行われた。

(5) 1907年ドイツ工作連盟の創立時に、ミュンヘン手工芸連合工房とドイツ手工芸工房ならびにドイツ家財道具工房は創立会社に名を連ねた。

(6) ミュンヘン手工芸連合工房とドイツ手工芸工房は、船舶の内装の受注や規格家具の量産化、従業員の増加に鑑み、1908年に各々



図3 ドイツ工房内塗装部門 1911年頃

の工場を建設し、生産体制の強化を図った。

(7) 1909年にミュンヘン手工芸連合工房とドイツ手工芸工房は共同販売契約を結び、有限会社統一ドイツ工房販売所ミュンヘン、ドレスデン、ブレーメン、ベルリンを創設したが、すぐに契約を解消し、その後両社ともドイツ各地に支店を置き、販路を拡大した。

(8) ミュンヘン手工芸連合工房は1910年のブリュッセル万国博覧会において、ドイツの美術工芸部門を統括した。

(9) ミュンヘン手工芸連合工房は1907年に、ドイツ手工芸工房は1912年に株式会社化した。

(10) ミュンヘン手工芸連合工房、ドイツ手工芸工房、ミュンヘン家具調度工房、ドイツ家財道具工房では、それぞれの工房で図案家と契約を結んだが、図案家たちはこれらの工房の間を比較的自由に行き来し、図案を提供していたらしい。

1900年前後にドイツに乱立した家具の制作販売を主体とする美術工芸の「工房」は、しだいに近代的な経営体制を整えながら、吸収・合併・提携により会社の規模を拡大し、時には敵対的關係において競争することによって急速な成長を遂げ、ドイツ美術工芸の発展に寄与した。

以上、平成16年～平成18年の科学研究費若手研究(B)および今回の平成20年～平成22年の科学研究費若手研究(B)により、申請者は近代ドイツ美術工芸工房のうち代表的な工房であるミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房の1898年の設立時から1914年のドイツ工作連盟創設までの活動とその周辺の「工房」についてある程度明らかにすることができた。今後、本研究を踏まえて創立会社に名を連ねた「工房」のドイツ工作連盟における活動の内容について調査を進め、「工房」がドイツ工作連盟において果たした役割について究明していきたい。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計4件)

- ①針貝綾, ミュンヘン手工芸連合工房のドイツ国内における展示活動, 研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学連携論文集—, 査読有, Vol. 3, No. 2, 2010, 1-16
- ②針貝綾, 第3回ドイツ美術工芸展ドレスデン1906年の展示構想と構成, 及び出品作に関する考察, 長崎大学教育学部紀要—人文科学—, 査読無, 76号, 2010, 37-50
- ③針貝綾, ドイツ国内におけるミュンヘン手工芸連合工房の展示活動, 長崎大学教育学部紀要—人文科学—, 査読無, 75号, 2009, 31-45
- ④針貝綾, 初期ユニット家具シリーズ: ブルーノ・パウルの「タイプ家具」, デザイン学研究, 査読有, 55巻4号, 2008, 47-56

〔学会発表〕(計1件)

- ①針貝綾, ドイツ手工芸工房附属工芸専門学校と教育工房の教育課程についての検討, 筑波大学芸術学美術史学会, 2010.9.18, 筑波大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

針貝 綾 (HARIKAI AYA)
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70342425

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: